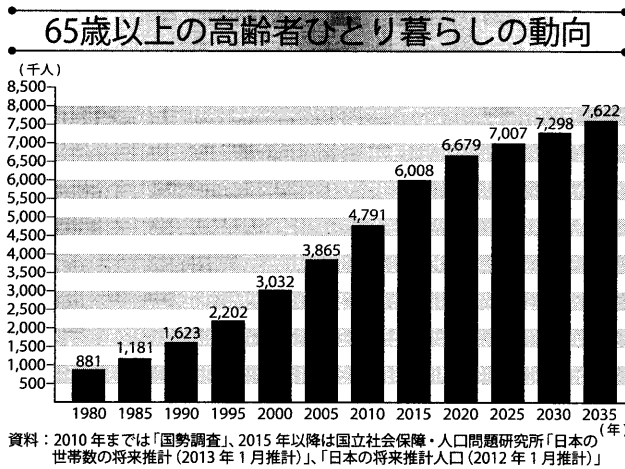


「老後ひとりぼっち」



田中さんの長いひとり暮らしは、そこから始まった。ケースワーカーの仕事は適職で、定年退職のその日まで、充実したものだったと彼女は話す。

彼女の2DKの部屋に上がらせてもらい、家事が苦手なことはすぐにわかった。玄関は暗く、モノが置いてあり足元が怖い。使用済みの食器がシンクに溜まり、清潔とは言えないキッチン。食器棚の中はレトルト食品がぎっしりで、料理をしている気配は伝わってこない。

居間には、新聞や本が山積みになっており、どこに座っていいのか困るほどだ。

最初は、雑然とした室内に戸惑ったが、こうした暮らし方は、高齢者のひとり暮らしのお宅には多いのかもしれないと、後に、他のお宅にお邪魔した時に思った。

男性のひとり暮らしは汚いと言われているが、女性も高齢になると同じなのかもしれない。

田中さんの話によると、80代に入ると周りの接し方が一変したという。市役所も民生委員も田中さんをお年寄り扱いし始めたのだ。

おしゃべりがしたいと言えば、「お年寄りの会がありますよ」で終わり。保育園のボランティアをしようと出かけても、年齢を聞くと皆がひく。いくら自分に社会参加の意欲があろうと、60代のグループには入れない雰囲気があった。

取材の1年後、田中さんに認知症の症状が出たようで、近所の人から「おかしい」と市役所に通報が入り、ケアハウスに入所したと民生委員の方から聞いた。

彼女がケアハウスに入れたのは、月15万円の費用が払えたからで、もし、年金が少なかったら、どうなっていたのか。

「ヘルパーになればいいって、簡単に言うけど、めまいがするほど働かないと、お金にはならない。ヘルパーの仕事は、とても50代以上の女性の仕事ではない」

ヘルパーという仕事は、体力のある年齢の人にしかできないというのが彼女の結論だ。

・・・

加藤さんは言った。ふと、夜中に目が覚め「どうしよう」と不安になることがあると。その時思うことは「お金が底をついたらどうしよう」と「長生きしたらどうしよう」の2点だ。

2人ならがんばれるかもしれないことが、1人となるとどうなのか。「今はまだ60代なので、がんばれますが、10年、20年後に、お金が底をついたときのひとり暮らしの自分を想像すると怖い」

実は3年前に直腸ガンと前立腺ガンがあることがわかり、それ以来、ガンとどう生きるかが彼の人生のテーマとなった。

ガンを患ったからと悲観することなく、むしろ「ガンよ、ありがとう！」という心境だということだ。

彼のガンは悪性だった。彼は本で情報収集し、10か所以上の病院を訪ね、治療法を研究した。その中で出会ったのが、『患者よ、がんと闘うな』（文春文庫）や『がん放置治療法のすすめ』（文春新書）の著者である近藤誠先生だ。近藤先生にセカンドオピニオンを求めたところ「ガンを育ててみたらどうですか？」と言われ、そういう捉え方もあるのか、と気持ちが楽になったということだ。

国立などの大病院が勧める治療法は「全摘手術」の一点張りで目の前が真っ暗に。周りの臓器までとるような全摘手術をしたら、おそらく手術が成功しても車椅子生活になるだろう。そうなる、ひとり暮らしは厳しくなる。生活の質が落ち、ベッドに寝たきりになる可能性もある。今のひとり暮らしを続けたい！

「ガンの全摘」から「ガンを育てる」に決めた角田さんに迷いはなかった。放射線治療とストーマ（人工肛門や人工膀胱などの人工排泄口）で、ガンと一緒に生きることにしたのである。

それにしても、目の前に座っている、さわやかな笑顔でバクバクとステーキを食べている角田さんがガン患者とは、とても思えない。ひとり暮らしで困ったことを質問すると、「入院する時の行き帰りかな。息子が来てくれたが、関西にいる娘はなんの役にも立たなかった。結局、入院中に助けてくれたのは、友人だった」と笑った。

リゾートマンションのような有料老人ホーム

・・・

みんなに背を向けて、1人で食べる食事。これが毎日続いているのかと思うと……。ただ死を待ち食事をしているだけ……。海風が空しい……。

昼食を試食させてもらったが、あまりのまずさに同行した友人と目を合わせてしまった。

ご飯がまずいとはどういうことなのか。「日本のどこに、こんなまずいお米を作っているところがあるの？」と聞きたくなるほどのまずさだった。ほうれん草のおひたしと焼き魚に小鉢がついていたが、どれも、「どうしてこうなるの？」と首をかしげたくなる調理の仕方だ。

町のコンビニのお惣菜のほうが数投おいしい。

・・・

見た目は立派な定食になっているが、基本のご飯、味噌汁が失格点だ。あとで、くまなく見学させていただいてわかったことだが、**ここには厨房がない**。

彼の老後の予定は、ひとりになったら老人ホームに入ることだった。どんなところでもいいと思っていたので月に**10万円も払えば入れる**と思っていたらしい。

ところが、役所に行き、どこか紹介してくれないか聞いたところ、彼の年金では入れるところはない、とあっさりと断られた。

「**話も聞いてくれないんだよ。門前払い**」。彼は、行政の冷たさに凍りついたと言う。

お父さん、自分の老後のことは自分でやってくださいよ。僕たちは僕たちの生活で精いっぱいだからね。

仕事柄、これまで多くの有料老人ホームを見てきたが、高級であればあるほど、本人の意向で入所していないことがわかる。

「わあ、素敵なホームですね。羨ましいわ」と声をあげたくなるホームに入所しているお年寄りに限って、**笑顔は少ない**。お金持ちが悪いとは言わないが、お金持ちの娘夫婦や息子夫婦に入れられているからだ。高級なホームに親が入っていれば世間体もいい。

シングルキャリアウーマンだった**82歳**の女性は、**80歳**を迎えたある日、これから先を考える時、一軒家のひとり暮らしは困難と判断し、自分の経済に見合った有料老人ホームを最後の住まいとして選んだ。

一軒家を処分し、**10年分**の家賃に相当する約**1500万円**の部屋の賃貸料を前払いしての入所だった。マスコミでよく取り上げられるシニアハウスの草分けの会社が運営している有料老人ホームなので、安心してしたが、入所後にわかったことは、何をするにも別途費用を請求されることだった。具合が悪いので部屋に食事を運んでもらうにもお金がかかる。そのぐらい管理費のうちだと思うが。

部屋で具合が悪くなり倒れた時も、翌日の昼まで誰にも発見されることがなかった

と言う。これなら家にも同じだ。

それだけではない。恐ろしいのは、**入所後の管理費や食費、サービスの値上がりだ。**
「**食事の質も味も落ちた**」と彼女は嘆く。経費削減により、安く請け負ってくれる業者に変えるので、こういうことが起こるらしい。

女性を悪く言う気はない

が、女性はとても現実的で自己中心的な動物だ。一心同体の仲良し夫婦は別として、**ふつうの日本の夫婦関係はとても淡泊だ。**夫婦で毎日、愛情を確認し合うこともないし、子供ができた時点で女性は母親になってしまい、夫への関心は以前にも増して減るのが一般的だ。

男性が家族のために一生懸命働いてくれているうちに、男性の家庭での存在は薄くなり、退職して稼げなくなり、子僕も巣立ってしまい、気づくと、うっとうしい夫と2人だけ。愛情を育ててきた夫婦は、手をつなぎ美術館巡りで第二の人生を謳歌できるが、**一般的な夫婦は、女性は女性の友達と遊び、男性はひとりで図書館通い。**

本当にこんなこと言いたくないのだが、**日本女性は、愛よりもお金のほうが好き**なようだ。伴侶をなくして再婚したがるのは男性のほうで、女性は「せいせいした」と思っている人が多い。

生物学的に見ても女性は男性より**生命力**は強い。**精神力**も女性のほうが強い。気も強い。ただ、体力が男性よりないだけだ。

そう、女性に**経済力**さえあれば、もう何も怖いものはない。それが女性のように思う。

わたしたちが老いていく中で「保証人」を求められる場面は主に三つだ。そして、その保証人とは、身元を保証する「身元保証人」である。

- 1 家を借りるときに身元保証人を要求される
- 2 介護施設・有料老人ホームに入所する時に、身元保証人を要求される
- 3 入院、手術の時に身元保証人・身元引受人を要求される

病院は何を患者に保証させたいのか。それは入院費や医療費の支払い保証、手術や治療に対する同意・死亡時の手続きや身元引受人である。

もし、手術が失敗に終わって死亡したら遺体の引き取り手が必要だ。死ななくても病院から退院するのに人の手が必要だ。ひとり身の人を玄関に置き去りにするわけにはいかない。

事例1 保証人が来るまで手術をストップされた

— 68歳・女性 —

「4月末、わたしは駅改札口前の階段から転落し、救急車で搬送され、入院しました。その時医療側から家族の保証人が必要だと言われました。遠方ですが兄が1人おり、結局、**兄の到着を5時間待ってからの手術**でした。遠方でも兄がいたからいいですが、もし兄が死んだらどうなるのか。現実感が増して、不安になりました。医療側や行政に制度変更させるにはどうしたらいいか。手段はあるのでしょうか」

まず、「身元保証を求めますか」の質問に対し、「求める」と答えたところは、病院では95・9%、介護施設では91・3%。さらに、「身元保証人が立てられない時は、利用を認めない」と答えたところが、病院では22・6%、介護施設では30・7%だった。

これが日本の冷たい習慣だ。老いてひとりになり、介護施設のお世話になろうとしても、保証人のない人は拒否されるのだ。

家族に代わって身元保証をやる場所は、NPOりすシステムを皮切りに、この20年間で100以上の民間事業者・法人が参入している。わたしが知る限りで大手と思えるところは、NPOりすシステム、NPOきずなの会、日本ライフ協会（元公益財団法人）だ。おひとりさまの終括と言うと、この3つが頻繁にテレビで取り上げられてきたので、ご存知の方も多はずだ。法人が家族の代わりにしているサービスは、大きく分けて下記の3つだ。

- 1 身元保証人を引き受ける
- 2 生活支援
- 3 葬送支援

ある法人の説明会に参加した60歳の女性の話では、どういう流れで進み、いくらかかるのかを会場で質問しても「人によって違うので、**まずは第一段階の契約をしてから、先のことはお話しします**」の一点張り、入会前に、細かい点に関する質問をさせないようにしていると感じたと言っていた。

第一段階と言っても、それに50万円ほどかかるのに、**50万円払ってからでない**と先の詳細が聞けないというのはおかしい、と不信感を露わにした。ただ、ほとんどの参加者は、法人の説明に対して何の疑問も持たず、「ああ、よかった。これで安心した」と心から喜んでいたということだ。

日本ライフ協会で身元保証人になってもらい、彼女は4年前に何の問題もなく念願だったある有料老人ホームに入所した。生涯ひとり身の彼女は、元気なうちに最後の場所を確保しておきたかったので、早めの住み替えをしたというわけだ。

もちろん、ここで死ぬつもりだった。ところが、今回の破産の火種が入所中の彼女にまで飛んできた。

彼女はホームから「1か月以内に別の保証人を立てるように」勧告された。ホームの利用料（管理料）十数万円は一度も滞納したことがないし、これからも支払いの心配はない。そのことを彼女は管理者に告げると、なんとこんな言葉が返ってきたのだ。

「だったら、**終身保証してあげますから、あなたの全財産をこちらに全部預けなさい**」。信じられないが、本当の話だ。

はっきり言って、男女共に、60を過ぎたら、全員が中性だ。そのことがわかってない中高年男性が多すぎる。実は、言葉には出さないが、女性たちは男が抜けきらない男性にうんざりしているのである。

ちょっと親切にしたり、ちょっとご飯に誘ったりすると、なんだか知らないが、自分に気があると思うらしい。どこからそのうぬぼれはきているのか、それが信じられない。こちらは、ただ聞きたいことがあるから、ただ相談したいことがあるから誘っただけなのに、気があると思うので困る。日本男性とはなんと面倒なのか。

わたしはここで大きな声で言いたい。「60過ぎたら、恋はないのよ」。60からは、恋の相手ではなく、**同志**なのだ。はっきり言うが、「男」にこだわる男は女性から嫌われる。性別を捨てた男性は、女性から好かれる。ここをよく学んでほしい。それが、ひいては楽しい老後ひとりぼっちにつながるからだ。

見た目は中身より大事。まずは、寂しい人に見える格好をしないことだ。人生を楽しんでいる人に見える格好をすること、これが大事だ。

もし、あなたが死ぬほど寂しくて毎日死にたくなっているとしても、茶系やグレーの服装で外に出ないことだ。不思議なもので、心が塞いでいると、そのような無彩色の色に手がいく。いつも、グレーやベージュを身につけている人は、シックなお洒落をしているつもりかもしれないが、中高年の場合、心の色だと言える。自分では意識していないだろうが、元気で夢を持って暮らしている時は、明るい色を着たくなるものである。

楽しいひとりぼっちと寂しいひとりぼっちの 見た目の違い

男性の場合

楽しいひとりぼっち	寂しい老後ひとりぼっち
○体が臭わない	×体が臭う
○髪が整っている	×髪を気にしていない
○こざれいな身なり	×まったくかまわない身なり
○アイロンのかかったシャツ	×しわのあるシャツ
○白系の服装（明るい色）	×茶系の服装（暗い色）
○いつもおだやか	×いつも無表情
○あいさつが自然にでる	×だまっている

女性の場合

楽しい老後ひとりぼっち	寂しい老後ひとりぼっち
○化粧をして外出する	×すっぴんで外出する
○髪をこまめに染めている	×髪はごま塩のまま
○きれいな明るい色の服装	×茶系やグレーなど暗い色の服装
○アクセサリーをつけている	×アクセサリーなし
○いつも笑顔	×いつも無表情
○姿勢がいい（前を向いて歩く）	×姿勢が悪い（下を向いて歩く）
○ことばがすぐにでる	×ことばがない
○気前がいい	×ケチ